



エンドレスシンドローム



# 目次

エンドレスシンδροーム . . . . .	1
かみひこーきらぶれたー . . . . .	3
硝子玉の世界より . . . . .	5



## エンドレスシンドローム

小向は最強最高の相棒だ。会社の同期で、俺とは営業の名物コンビ。息の合った、しゃべくりと、馬鹿げた、じゃれ合いでもって、営業先やイベントで人を笑わせない日はなく、着実に自社製品の売り上げにつなげていた。

入社してから五年というもの、営業スマイル百二十パーセントシャカリキに二人三脚で、仕事に邁進していたのが、その朝、小向はギャグを交えた挨拶を返さず、うな垂れたまままでいた。髪は寝癖をつけたまま、血の気のない顔をむくませて、瞼を腫らし、目を充血させて。

満身創痍な小向とは駅で遭遇し、まだ時間もあったから、会社に行く前に、喫茶店へと連れこんだ。で、喫茶店名物「戦う企業戦士にこの一杯」がキャッチコピーの野菜ジュースを二人分、頼んで、事情を聞いた。

なんと、大学生のころから交際しつづけ、同棲していた彼女に、別れを告げられたそう。一晩中、泣き腫らした小向はもちろんだが、俺もショックを受けた。だって、二日前には「そろそろ、けじめをつけようと思って」と婚約指輪を買いにいったのに、同行したのだから。

理由が気になったとはいえ「親しい仲にも礼儀あり」と弁え、「そうか」と返し「今日くらい、会社を休んだらどうだ？」と助言だけをした。首を振って小向曰く「家でじっとしているほうが、耐えられない」と。

ただ、指先まで、身なりに気を配るのが鉄則の営業職にあって、小向の惨状は完全アウト。なので、俺が課長にかけ合い、事務仕事の手伝いに回してもらった。

昼食時には「たまには、違う部署で働くのもいいな」と笑みを見せたからに、ほっとして、その日はどうにか、やり過ごせた。かといって、すぐには復調できるわけなく、気長に寄り添って見守ろうと見込んでいたのが、翌日、入社途中に小向から「インフルエンザにかかったから、しばらく休むことになる」とメッセージが届いた。

すかさず「大丈夫か？ 家に行こうか？」と送れば、これまた間髪入れないよう「彼女とは、まだ同居しているから、大丈夫」と返ってきて。そのメッセージを見て、しばし指を止めたなら「分かった。会社のほうは任せろ」と打ち、ため息をつきつつ、スマホをポケットにしまった。

意外にも、五年もつきあいがある、最強最高な相棒の、家にお邪魔したことはないし、彼女と体面もしたこともない。これといって理由はなく、なんとなしに俺が気兼ねだったのだが、小向も思うところがあったか、家に誘い、彼女に会わせようとしなかったもので。

「看病して、看病されて、よりをもどすのか」と思いかけて、頭を振った。そうして気を取り直してからは、看病は彼女に任せ、俺のほうは、会社の模様や仕事の進捗を知らせたり、「茶柱が三本も！」「カラスの糞にやられた！」など他愛もない報告をしたり、メッセージでもって励ましつづけた。

が、三日経って、小向の返信頻度が減ってきたのに、どうも胸騒ぎがして、居ても立ってもいられなくなり、昼食前に事務の部所に顔をだした。呼び出したのは、二歳下の後輩、遠藤。小向のゲーム仲間だ。

小向は、かなりのゲームオタクだが、俺は門外漢。とあって、三人で会ったことがなければ、俺と遠藤との交流もなく、小向から、たまに話を聞くくらいしか、知らなかった。

遠藤のほうも、俺への認識は似たようなものだろう。俺を一目見て、目を丸くしながら、でも、さほど驚かず「小向さんのことですね」と察してくれた。

昼食を共にしつつ「なにか小向から聞いているのか」と問うと「いえ」と目を逸らしたものを「ただ、根拠はないけど、引っかかることがあって」と語りだして。

小向が彼女と別れる三日前、花の金曜日に、共に酒を酌み交わし、ゲーム談議に花を咲かせたという。そのとき、話題になったのが、PCゲームの「シンドローム」。

十八禁の男と男の恋愛ノベルティゲームだとか。精神病棟を舞台に、プレイヤーは医師になって、シンドローム、いわば、症候群が見られる患者とやり取りをしていく。

医師として、治療を通し健全に心を通わせることもできるし、患者のシンドロームの症状に振りまわされ、精神崩壊して肉欲に溺れることもある。ゲームの内容自体、依存性が高そうだが、さらに厄介なことには、患者の種類、ストーリーの分岐や、エンディングのパターンが、日々、どしどし追加されているらしい。

## かみひこーきらぶれたー

中学まで勉強に励み、部活動に勤しみ、クラスメイトや友人と交流を深める、変哲ない学生でいた。はずが、高校に入ってすぐ、見知らぬ先輩に目をつけられて、今は、後ろから腕で首を絞められ、屋上に立たされている。

柵の向こうの眼下には、わらわらと下校する生徒たち。傍に立つ、イジメの首謀者、郷田先輩は拡声器のスイッチを入れ、彼らに呼びかけた。

「はい！ 今から、ここにいる鴨島くんが書いたラブレターを、かみひこーきで飛ばしまーす！ 『つきあってあげてもいいよ！』と慈愛精神溢れるお方は、ぜひ、屋上までお越しくださーい！」

一呼吸、置いて「あ、ちなみにこれ、罰ゲームで、イジメではないんで！」と付け加える。いつものことだ。

あくまで、先輩がお気に入りの後輩に目をかけ、イジメているのではなく、いじっている体にする。おかげで、一部を除いて、ほとんどの生徒や教師には気づかれていない。

「気づいたとしても、助けてくれないだろうけどな」と遠い目をしているうちに、三人の手から、九つの紙飛行機が放たれた。風によって、三つはあらぬ方向にいき、残りののは、悲鳴をあげて女子が避けたり、あえて捕らえた男子「お前、いけよー」「どうしよっかなー」と冷やかしたり。

「恥ずかしくて死にそう」と人を居たたまれなくするような、反応しか見られないかと思いきや。一人だけ、屋上を見据えて佇み、飛んできた紙飛行機を、そっと手に取った男子学生がいた。注視されるのも、どこ吹く風で、紙飛行機を開き、目を通したなら、校



内のほうへ。「まさか」と僕と郷田先輩らが、出入り口に向いてから、思ったよりも早くに、扉が開け放たれて。

敷居の向こうに居たのは、息を乱し、紙飛行機を握りしめる諸星先輩だった。

## 硝子玉の世界より

家の近くには、ラムネを瓶詰めする工場があり、年中、スーパーでは商品が置かれていた。ので、夏に限らず、習慣的に飲んでいたものだが、瓶の中の硝子玉を取りだせたことはない。

ラムネに入っているのは「A玉」おもちゃなどで売られているのは「B玉」と呼ばれている。ラムネに入れられるのは、蓋代わりで、炭酸が抜けないう密閉できるのが「A玉」。すこしでも歪みがあって使い物にならないのが「B玉」。

「選ばれし良質な硝子玉だけが、ラムネにこめられる」と工場のおじさんは教えてくれ、規格外の「B玉」を俺たち、近所の子供にただで、くれていた。

B玉もキレイだったものの、「選ばれし」と聞いたからか、A玉のほうが磨きがかかっているように見えた。ラムネの分厚い硝子瓶を通して眺めると、尚のこと、数多の星が瞬くように、きらめいて。

地球よろしく、広い海をたたえた、一つの星のようだった。手にすれば、世界征服した気分になれるのではないかと考えて、どうにか、硝子玉を取ろうとしたものの、できず。取りだす方法ばかりは、工場のおじさんも教えてくれず。

「もう、割るしかないか」と呟いたところ「やめたほうがいい」と返された。たまに遊びにくる従兄で、そのとき俺は五歳、従兄は七歳。その弟で、俺の従弟、三歳も肩を並べてラムネを飲んでた。

「でも、硝子玉が閉じこめられているようで、可哀想だ」と訴えれば「閉じこめられているのが、悪いってわけじゃないと思う」と。今から思えば、従兄は子供らしからぬ思考をし、発言も哲学的で意味深なものばかりだったような。

「それに、取りだしたら、キレイじゃなくなるかもしれない。閉じこめられているからこそ、キレイなんだよ、多分」

今も、理解しきれない言葉を、でも、当時の俺は聞き入れて、以降、壇を割ろうとはしなかった。というのも、一人っ子だったこともあり、俺は二人を兄弟のように慕っていたからだ。

物知りで、頼りがいのある従兄には、どこまでも従順だったし、人懐こく愛らしい従弟が伸ばす手を、いつも握って、どこまでも先導をしてやっていた。このころは、まさにラムネの硝子玉よろしく、内なる宇宙の、ミクロな星の住人でいたのだろう。

大人の庇護と規制に囲われた、さらに視野の狭い子供の世界は、たしかに従兄が告げた通り、美しかった。と、思い知ったのは、突然、従兄がこの世を去ってからのこと。

前日、雨が降って、流れが急だった川に溺れての事故死。というのは、表向き。叔母が母に語ったには「同級生の女の子を庇ったの」とのこと。

つづきは R15 です。

アルファポリスで公開しています↓

<https://www.alphapolis.co.jp/novel/352542676/602418098>

---

BL小説集「エンドレスシンδροーム」試し読み

---

著 ルルオカ②

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---